

国立情報学研究所  
平成 27 年度  
学術情報リテラシー教育担当者研修

## 「大学生に効果的な教授法」 + 「プレゼンテーション技法」

夏目 達也 (名古屋大学・高等教育研究センター)

### 【本時の目的】

#### I. 講義

学術情報リテラシー教育の内容・手法を改善するため、大学生の学びを促す教え方とその具体的な手法について、教育工学の見地から解説する。

#### II. ワークショップ

学術情報リテラシー教育におけるプレゼンテーション能力を高めるため、資料作成法を含め、プレゼンテーションの具体的スキルやポイントについて、ワークショップ形式で習得しあう。

## I. 講義「大学生に効果的な教授法」

### 1. 大学生の学びの特徴：「大学生の学びを促す」とはどのようなことか

#### 1.1 大学生の基本的プロフィール

##### 1.1.1 学生の特徴の多様化

- ◆ 入学前＝高校段階から多様化が顕著に
  - ・ 背景としての高校教育の多様化：普通科、専門学科、総合学科。  
普通科内でも多様化が進む。  
高卒後の進路：大学進学率の割合等
  - ・ 多様化を促進する文教施策  
→ 文科省による高校教育改革に関する各種プログラムの実施
- ◆ 学力、勉学目的、学習経験（学習の質・量）、学習志向性等の多様性
  - ・ 入試方法多様化：学力を直接問わない型の入試（推薦・AO等）の増加  
一般選抜による入学者割合：65.8%（2000年度）→56.6%（2014年度）

##### 1.1.2 学生の学習行動

- ◆ 学習時間が短い：アメリカの大学生の約半分。とくに低学年で顕著。  
授業外の学習時間、長期休暇期間中の学習時間
- ◆ 主体的・能動的な学びへの意欲不足。そもそも知的学習活動への興味・関心が低下か。
  - ・ 教員への依存的なメンタリティ・態度  
<学習・大学教育に関する彼らなりの考え方>
    - ・ どこかに正解がある。
    - ・ 教員が「真理」「回答」をもっている。
    - ・ 教員が教えてくれる。それを聞けば問題解決。
    - ・ ネット上に「正解」がある。情報源へのアクセスで問題解決。
    - ・ 情報は安易な手段（しばしば「無料」）で獲得できる。
    - ・ 難しい知識・情報はスルーでOK。価値の吟味は不要。
  - ・ 基礎学力・基本的な学習習慣が未形成の場合も少なくない。  
基礎学力・学習習慣形成のトレーニングを受ける機会の欠如

##### 1.1.3 学生の生活行動

- ◆ 一日・一週間での生活行動とそこにおける学習時間の位置
- ◆ 学習行動を阻害する要因・条件は多い。

##### 1.1.4 学習リズム

- ◆ 学生の学習意欲・行動は常に変化：  
学年単位の変化だけでなく、学年途中での変化も。

### 1.1.5 特別な配慮を必要とする学生

- ◆ 身体面・精神面でいねいな指導を必要とする学生
- ◆ 特別ニーズを有する学生

### 1.2 学習行動の変化の背景：

### 1.3 プレゼン対象の学生のプロフィール

- ◆ 学習への「構え」、ニーズ

- 学生が聞いてくれない  
「検索でしょ、もう知ってるよ！」
- 「学生が情報リテラシーの必要性を感じていない！！なぜ感じないのか」
  - ① 専門分野と関係ない      ② 楽しくない      ③ もう知ってる（つもり）
  - ④ 面倒くさい      ⑤ Google、Wikipediaでいい

【資料】H26 年度研修・グループ討議成果物「マリアナ海溝より深い！図書館員と学生との“溝”を埋める」  
H25 年度研修・グループ討議成果物「学生がメリットを感じられる情報リテラシー教育」

## 2. 大学における教授法：「学びを促す教え方」の基本的条件

### 2.1 大学生の学習における授業の位置

- ◆ 授業の占める比重は必ずしも大きくない。
  - ・ インストラクショナルデザインの基本前提：以下の 3 点に集約できる（向後）。
    - 1) 学習は多くの変数に左右される。
    - 2) 効果的に学習を支援する方法はある。
    - 3) 学習支援の方法は常に改善できる。

#### 2.1.1 学習に関係する多数の変数：（向後 2012）

- ◆ Miller ほか（2000）による「心理療法の効果要因」の分析から

<心理療法が効果を発揮してクライアントが治るときの要因>

自己の自然治癒力（治療外要因）、クライアントとの人間関係（治療関係要因）	70%
治癒に対するクライアントの期待・プラセボ（信じ込みによる治癒効果）	15%
治療そのものの効果（モデルや技法要因）	15%

<これを、教育とその学習成果を占う要因に適用してみると>

教育外要因（学び手の本来の学習能力）	40%
教育関係要因（教育者・学習者の関係）	30%
期待、希望、プラセボ要因（ピグマリオン効果）	15%
モデルや技法要因（教え方そのものの効果）	15%

### 2.1.2 授業時間外・授業以前の諸要素が重要

- ◆ 授業の質を高めるために、授業担当者が授業前・後にすべきことは多い。

授業前：

授業後：

### 2.2 授業前に授業担当者のすべきこと

- ◆ 授業の成否の多くは、授業前に決定？
  - ・ 授業準備の具体的内容

#### チェックリスト

- ・ 当日配付用シラバスは、受講生の数だけ準備できていますか？
- ・ 授業の進め方・役割分担について、TAと確認しましたか？
- ・ 教室の下見をしましたか？
  - チェック項目：鍵、教室の大きさ、机、椅子、黒板、照明、  
マイク、空調、プレゼン機器、その他
- ・ 使用する機器・施設の予約・確保はできていますか？
- ・ 事務窓口の担当者を確認しましたか？

【資料】名古屋大学高等教育研究センター「成長するティップス先生」

### 2.3 大学における授業改革の概況

- ◆ 大学教育をめぐるパラダイム転換：
  - ・ 教員中心から学習者中心への転換
    - 「学習者中心」の教育とは具体的にどのようなことか？
- ◆ 学生の学びを促す：
  - どのような状況にあるときに、学生はもっとも学ぶのか？
- ◆ アクティブ・ラーニングとは？
  - ・ 学習者の学習への積極的参加を促す教授・学習法の総称。教員による一方向的な従来からの講義形式の授業・学習スタイルとは異なる。
  - ・ 発見学習、問題解決学習、経験学習、調査学習のほか、教室内での集団討論、ディベート、グループ・ワーク等を含む。
    - 例：「一方向型授業」から「双方向型授業」への転換
  - ・ 双方向型にすれば学生は歓迎するか、学習意欲は向上するか。
    - 学生が歓迎すれば「学習者中心」といえるか。

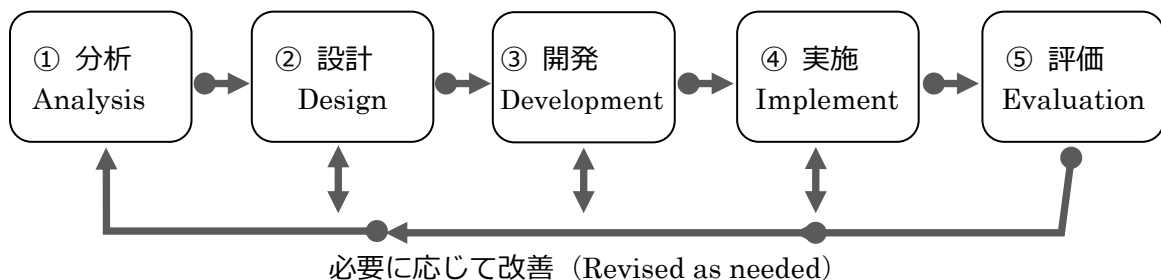
### 3. 効果的な授業のための条件：「学びを促す教え方」の具体的手法

#### 3.1 基本的な問題

- ◆ 効果的に学習を支援する方法はある？
  - ・ 「意図的教育観」と「成功的教育観」（沼野 1986）
  - ・ 「意図的教育観」：ある意図をもって何かしら働きかけを行えば教えたことになるという考え方。
  - ・ 「成功的教育観」：意図をもって行動し、生徒が学ぶべき内容を理解できれば教えたことになるという考え方。
- ◆ 「効果的な授業」とはなにか？
  - ・ 授業の効果：何によって測定するか？
  - ・ 「効果」：誰にとっての効果なのか？
  - ・ 「効果的」とは、どのような状態になることか？
  - ・ 何がわかればわかったことになるのか？
- ◆ 授業の目的・目標の設定
  - ・ 各授業の目的・目標を一言でいえるか？

### 4. 授業改善のための方法

#### 4.1 授業づくりの方法：ADDIE モデル



行動	具体的な内容
①分析	学習者の特性や前提知識、教える内容を分析し、目標を明確化。
②設計	教材研究を行い、教える内容の見取り図を作成。
③開発	単元の計画、授業の流れをまとめ、教材や学習環境を整備。
④実施	指導案に基づき、用意した教材を使って実際に授業を行う。
⑤評価	授業後の検討会等で授業の振り返りを行う。

【資料】稲垣・鈴木（2015）、pp.3-4。一部を修正した。

## 4.2 シラバスの作成

- ◆ シラバスに盛り込むべき事項
  - ① コースの内容
  - ② 教師に関する情報
  - ③ コースのスケジュールに関する情報
  - ④ 受講生に関する情報
  - ⑤ 評価に関する情報
  - ⑥ 教材に関する情報
  - ⑦ 受講ルール

## 4.3 授業の設計手法

- 4章 日々の授業を組み立てる
- 4.1 明日の授業の作戦を練ろう
- 4.1.1 講義ノートがあるからといって、安心は禁物
- 4.1.2 内容を絞り込み、タイムマネジメントの発想をもとう
- ・ 熱心な教師の落とし穴とは？
- 4.1.3 1回分の授業を導入、展開、エンディングに分けて構成しよう
- 4.2 導入部は刺激的に
- 4.2.1 最初に授業の主題・アウトラインを紹介する
- ・ 今回の主題はなにか、なぜそれが必要なのか、それを学ぶことでなにが習得できるかを最初に明らかにする。
- 例：黒板に「今日のメニュー」を板書、ハンドアウトを配り全体を説明。
- 4.2.2 主題にうまくつながるような問題提起・例示を行う
- ・ 受講者にとって身近で、具体的なトピックス
- 4.3 展開部はスリリングに
- 4.3.1 いくつかのパートに分け、そのつど要点をまとめる
- 4.3.2 教科書、参考書からは一定の距離をとろう
- ・ 教科書、参考書を活用しながらも、過度に依存しない。
- 4.3.3 仮説と検証、問題提起と謎解き
- ・ 仮説の設定・検証
  - ・ 「なぜ〇〇は△△△なのか」という問いの設定、クラス全員でその理由を探る謎解き型（問題解決型）の展開
- 4.3.4 対立する学説を取り上げよう
- ・ 教師の見解に反対する学説を紹介、双方の是非を学生に評価させる
  - ・ 自分と異なる意見をもつゲスト・スピーカーの招聘
- 4.3.5 最新の情報・知識を盛り込んだ事例を紹介しよう
- 4.3.6 自分の研究成果を紹介しよう
- 4.4 エンディングは印象的に
- 4.4.1 効果的なまとめ
- ・ 残り10分～5分で今回の授業の内容をもう1回レビュー。
- 4.4.2 次回とのつながりをつける

【資料】名古屋大学高等教育研究センター「成長するティップス先生」(<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/>)

#### 4.4 学びを支援するための外側からの働きかけ (外的条件)

- ◆ ガニエの 9 教授事象 算数「長方形の面積」の場合

1. 学習者の注意を喚起	縦と横のサイズが違う2冊の本を見せ、どちらが大きいかと問う。
2. 授業の目標を知らせる	どちらも長方形と気づかせ、長方形の面積計算方法が本日の課題であることを知らせる。
3. 前提条件を思い出させる	長方形の相対する辺が平行、角が直角を確認。前にならった正方形の面積を思い出させる。
4. 新しい事項を提示する	長方形の面積の公式提示。公式を数例に適用してみせる。
5. 学習の指針を与える	正方形の面積の公式と比較、どこが違うかを考えさせる。同じところ、違うところに着目させ公式の適用を促す。
6. 練習の機会をつくる	これまでの例で未使用の数字を用い、縦横の長さの違う長方形の面積をいくつか自分で計算させる。
7. フィードバックを与える	正しい答を板書、答を確認させる。間違った児童に誤りの種類に応じなぜ違ったかを指摘する。
8. 学習の成果を評価する	簡単なテストで学習の達成度を調べ、できていない児童に手当て。次の時間の授業の参考にする。
9. 保持と転移を高める	忘れたと思える頃にもう1度、長方形の面積の出し方を確認。平行四辺形・台形の面積の出し方を考えさせる。

【資料】鈴木 (2002) p.79.

#### 5. 評価方法

- ◆ 評価の目的：学生の学習達成度の判定だけではない。
- ◆ 評価の主体：授業担当者以外にも。学生自身、第三者、専門家等も。
- ◆ 評価の対象：理解の程度だけでなく、実際にできるようになったか等も。
- ◆ 評価の基準：学習目標の達成状況、集団内の学生の位置
- ◆ 評価の方法：テスト、面接、観察、レポート、ポートフォリオ等  
→ 評価目的・対象・基準等との関係で選択。

#### 6. 授業の改善

- ◆ 授業はつねに見直しが必要。なぜか？
- ◆ 有効な改善方法とは？
- ◆ そもそも、フィードバックとはどういうことか？
- ◆ いつ、どのタイミングで、いかに行うか？
- ◆ 改善の視点とは？
- ◆ 改善を妨げる要因とは何か？
- ◆ 具体的な改善の進め方

## 7. まとめ

### ※ 参考資料 ① 授業の質を高めるための基本的な問い

1. 授業担当者の伝えたい内容が受講者に伝わらないのは、どのような場合か。  
伝達を阻害する要因をできるだけ多く指摘できるか。  
それらをいくつかの項目ごとに整理できるか。
2. 授業担当者の伝えたい内容を受講者に確実に伝えるためには、何が必要か。
3. 伝えたい内容を受講者に確実に伝えるために必要な事項のうち、授業者担当者の個人的努力で解決できることは何か（とくに授業の内容や進め方に関して）。
4. 授業担当者の伝えたい内容と受講者が学習する内容が同一になることは必要か。

### ※ 参考資料 ② 学生を授業に巻き込むための工夫・ヒント

「学生が情報リテラシー教育をうけるメリット」

- |               |                                    |
|---------------|------------------------------------|
| ・新入生がレポートをかける | ・効率よく学べる                           |
| ・参考文献を探せる     | ・社会生活で役に立つ                         |
| ・自主的に資料を探せる   | ・就職活動で役に立つ                         |
| ・場所としての図書館の活用 | ・情報の取捨選択・差別化ができる<br>(情報の概念についての知識) |

「メリットを感じさせる工夫の具体例」

- |                                 |                    |
|---------------------------------|--------------------|
| ・アクティブラーニングを取り入れる               | ・発表でほかのグループの調べ方を知る |
| ・学習成果を出す                        | ・「わからない」ところから始める   |
| ・フィードバックをもらう                    | ・使う教材をある程度絞る       |
| ・教員にヒントをもらい授業につながる課題設定（ヒントを与える） |                    |

【資料出所】H25 年度研修・グループ討議成果物「学生がメリットを感じられる情報リテラシー教育」

### ※ 参考資料 ③ 学生に学習を促すための工夫・ヒント

- |     |                 |
|-----|-----------------|
| 提案1 | 学生と接する機会を増やす    |
| 提案2 | 学生間で協力して学習させる   |
| 提案3 | 学生を主体的に学習させる    |
| 提案4 | 学習の進み具合をふりかえらせる |
| 提案5 | 学習に要する時間を大切にする  |
| 提案6 | 学生に高い期待を寄せる     |
| 提案7 | 学生の多様性を尊重する     |

【資料出所】名古屋大学高等教育研究センター「ティップス先生からの7つの提案」



平成 27 年度学術情報リテラシー教育担当者研修  
平成 27 年 11 月 19 日 (木)

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/>

- ※ 「7 提案」には教員編、学生編、大学編、IT 活用授業編、教務学生担当職員編、大学院生編があり、それぞれの観点から授業改善のための具体的提案を示す。
- ※ 各提案について、その内容を具体化するアイデア (=具体的な行動) を例示。  
「7 提案」のねらい：
  - ・優れた教育実践のための知恵を明示化、大学全構成員が共有するための枠組を提供。
  - ・優れた授業を通じた教育効果向上には、学生・教員・大学の努力の統合が必要。
- ※ 授業改善を教員の努力のみに求めず 3 者で協働。

**【参考文献】**

- 稲垣忠・鈴木克明、2011、『授業設計マニュアル』北大路書房。
- 稲垣忠・鈴木克明編著、2015『教師のためのインストラクショナルデザイン：授業設計マニュアル Ver.2』北大路書房。
- 向後千春、2012、「インストラクショナルデザインー教えることの科学と技術ー」。  
([http://kogolab.chillout.jp/textbook/2012\\_ID\\_text.pdf](http://kogolab.chillout.jp/textbook/2012_ID_text.pdf)、2014.11.01)
- 島宗理、2004、『インストラクショナル・デザイン』米田出版（産業図書）。
- 鈴木克明、2002、『教材設計マニュアルー独学を支援するために』北大路書房。
- 名古屋大学高等教育研究センター「成長するティップス先生」。  
(<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/>、2014.11.01)
- 沼野一男、1986、『教育の方法と技術』玉川大学出版部。

## Ⅱ. ワークショップ「プレゼンテーション技法」(第2限)

### 1. ワークショップの概要についての説明

- ・本ワークショップの目的
- ・本ワークショップの内容
- ・チーム・個人別のワーク：その内容と留意点

### 2. グループ討論

- 【課題】・グループメンバー各自の事前課題（プレゼン資料）の中から、各チームのベストを選出。  
・なぜそれがベストなのか、その理由を明確にする。
- 【方法】・自分がベストと考える課題の選出理由を3点指摘し、メモをする。  
・プレゼン発表者の決定

### 3. 代表チームによるプレゼン

- ・発表チーム数の決定：全体の時間数を見て決定。
- ・発表チームの選出：発表時間：各チーム5分

### 4. プレゼンに対する評価

- 【課題】発表チームの発表に対して、採点とコメントを行う。
- 【方法】全員が個別に、各チームのプレゼンに対して5分で採点とコメントを書く。
- ・採点の方法：5点満点で採点。なるべく格差を鮮明に。
  - ・採点の基準：
    - ① プレゼンのメッセージ・目的は明確か。
    - ② 内容・分量は適切か。
    - ③ プレゼンのスタイルは適切か。
    - ④ 受講者にメッセージが伝わったか。
  - ・コメント：各プレゼンのよい点と改善点を各3点指摘する。

### 5. グループ討論：

- 【課題】自チームのプレゼンに対する振り返り
- 【方法】・自チームの発表について、よい点と改善点を5点指摘。  
・「ベスト改善点」を選出。

### 6. 各自の振り返り：

- 【課題】本ワークショップで学んだことを書く。(2分間)
- 【内容】・自チームの報告、他チームの報告、自分自身の振り返りを通じて学んだこと。  
・今後、自分が授業を担当する際に使えるノウハウ  
・簡条書きで書く。10項目を目標。

### 7. まとめ